

序

病気を診断するためには多くの疾患を理解していなければならない。疾患を理解したうえで、その疾患に罹病した人の病歴を説明できるのか？を問いながら、確かめてゆく作業でもある。

主訴を聞きながら、頭にいくつかの疾患を思い浮かべ、主訴以外の症状の有無を聞いてゆく。症状の有無を適切に質問をするためには、キーとなる疾患を十分に知っておく必要がある。次に、思い当たる疾患が正しいのかどうかを検査で確認してゆく。検査も手当たり次第に行うのではなく、キーとなる検査を選んで行う。この過程が診断という謎解きの醍醐味である。ただ、その過程で必ずしも正しい診断に至るとは限らない。見当をつけた疾患と検査結果が合わなかったり、症状がフィットしないことがある。そのときに、一致しない情報を無視して突き進むと、間違った診断に行きついてしまう。一致しないことを放置することなく、謙虚に突き詰めてゆくことが臨床では重要なのである。

医学は、まだ完璧な学問ではない。未知の病気や病態が数多く残っている。そのことを認識して、常に謙虚に正しい診断に至ることを考えなければならない。

診断のための努力と、診断から考える病態から患者の症状を説明することができて、初めて治療の選択肢を提供できる。この過程が十分になされていれば、そこに医師と患者の信頼関係が生まれ、治療に対しても医師・患者ともに積極的になれるであろう。十分な説明ができて治療に積極的になれない場合には、その患者のこれまでの物語、すなわち歴史を考えてみることも必要である。家族に愛されているか？仕事で行き詰まっていないか？など、治療に積極的になれない状況を考える必要があり、また理解することが必要である。

ただ、循環器疾患はこのような慢性的に経過する疾患ばかりではなく、緊急の治療を必要とする場合がある。緊急の場合は、診断と同時に治療を行わなければ生命に関わってくる。短時間にどのように患者あるいは家族に納得してもらい治療に進むか？特に緊急の疾患では治療を行っても結果として期待通りの結果にならない場合がある。医学は、不確定な要素がまだまだ多い学問だから。重要なのは、常に診断が正しかったのか？治療の選択が正しかったのか？という自問自答をくり返し、謙虚に過程を見直すことである。そして、次の治療につなげてゆくことである。

本書では、循環器の標準的な症状と治療について概説してある。多くの情報が詰まった内容となっており、本書を読めば循環器疾患を俯瞰できるだろう。ただ、すべてを覚えることは難しいかもしれない、しかし、実臨床で少しでも診療のヒントになり生かされれば幸いである。

2018年9月

平山 篤志